高見　順

都に夜のある如く

都に夜のある如く

高見　順

文藝春秋新社

都に夜のある如く

昭和三十年十二月十五日　印刷
昭和三十年十二月二十五日　發行

定價　二八〇圓

著作者　高見順
發行者　車谷弘
印刷者　北川武之輔

發行所　株式會社　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷　細川活版所
製本　大完堂

萬一亂丁落丁の節は　お買求めの
書店又は本社にてお取換致します

Printed in Japan

目次

第一話　感じのある娘……五
第二話　浮氣な灯影……四七
第三話　いかがはしい密語……一〇一
第四話　見事な虐待者……一五一
第五話　東京の不知火……二〇一
第六話　川開きの夜……二四五
第七話　捨てられた男……二九五

裝幀並ニ挿繪

三雲祥之助

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

都(みやこ)に夜(よる)のある如(ごと)く

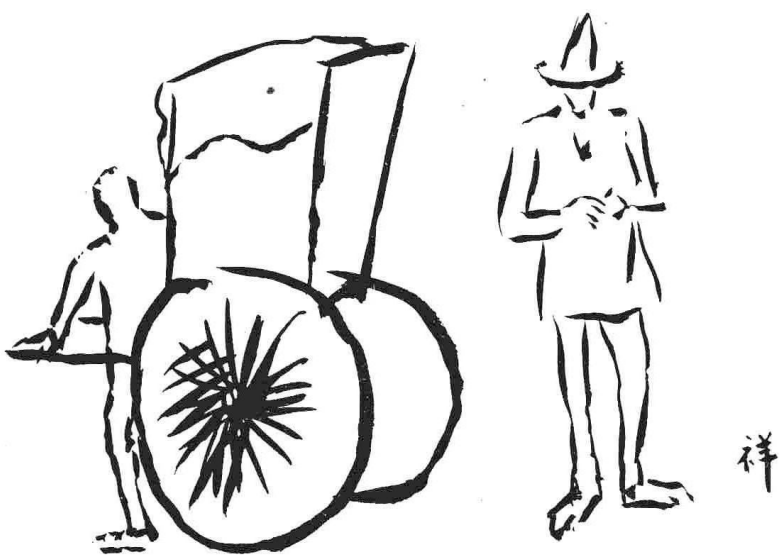
都に雨の降る如く
わが心にも涙ふる
心の底ににじみいる
この佗しさは何ならむ

ヴェルレーヌ
鈴木信太郎譯

都に夜のある如く
わが心にも夜がある
夜のしじまに忍びくる
このときめきは何ならむ

X氏即興吟

第一話　感じのある娘



女をだますのは、簡單なのだが、だましたあとの始末が、簡單にいかない」
「お互ひに、これで、困る」
「困ると思ふから、こませない」
「君は、しかし、大分だま　たらう」
「大分は、ひどいが　若い時分は、だますつもりてなく、だましてゐた」
「若い時分は、それですむんだが、今は、それてはすまない」
「だから、うつかり、女がだませない」
「と言つて、女を諦める氣持にもなれないのだから、困つたものだ」
　中年男が二人、いたつて不謹愼な會話をしてゐる。赤の信號が青に變るのを待つて、二人は鋪道にたたずんてゐる。一人は背が高いかはりに瘠せてゐて、他の一人は背の低いかはりに肥つてゐる。後者が、何か思ひついた顏で言つた。
「あとになつて困らないやうに、あらかしめ、ちやんと手を打つておいて女をだます——これが、つまり女をだますといふことなのかもしれない」
「あとて困るやうでは、だますにならない？　なるほど。——具體的に言ふと、その手は？」
「知つてたら、とつくに、女をだましてゐる」
「たしかに、しかし、さういふ手は、あるね」

信號が青に變つたので、廣いその昭和通りを、銀座へ向けて渡らうとすると、二人の横で等しく青の出るのを待つてゐた自動車が、一齊に飛び出して——二人に並行して進むのてなく、二人の方へといきなり曲つてくる。

車道に出た二人は、横合ひからくる自動車にまごまごすると轢き殺されさうなので、また鋪道に戻つた。横斷しようとする人間は二人だけなので、横斷者の多い銀座通りなどと違つて、自動車の方は遠慮のない走り方だ。さうして、その自動車の數がまた物凄く、大半はトラックのそれが、いづれも、銀座の方へと直線的に進行しないで、汐留、新橋の方へと曲つて行く。何列にも犇めくやうにして曲つて行くのだが、のこらず通り切らないうちに信號は赤に成る。

「困つたね。沖津君。これでは、いつまて待つても、通れやしない」

肥つたのが、憮然として言つた。

「ここは、いつもこれなんだ。全く困つたもんだ」

沖津と呼ばれた痩せた方が、このあたりの住居者のやうな口振りで、

「向うへ越すのが、まるて、いのちがけだ」

このあたりの人たちは、ここを「銀座の親知らず」と名づけてゐる。

「越せないとなると、越したいが」

「女の場合と同様か。玉置君」

「女を越せない俺たちが、こんなことで力んでゐる」

「演舞場の方へ拔けて、ぶらぶら、遠廻りして行くか」

と沖津が――沖津とはこの私のことなのだが、うしろを振り返つて言つた。二人とも、銀座へ出るのに、何もさう急がなくてはならない身ではなかつた。それだけにまた悠長に、玉置はそこにまだとどまつて、いかつい圖體をしたトラックの人もなげな横行を見ながら、

「女に對しても遠廻り主義といふところかな、俺たちは」

「遠廻りだけして、結局、行きつかない……？」

「中途で、やめてしまふ。バーなんかで、これはと眼を惹かれる女があつても、惚れて通つてゐるうちに――十回も會ふと、もう、できてしまつたあとのやうな氣がしてきて、すーッと熱がさめてしまふ。三四回頃に、できてしまはないと、駄目なもんだね」

さう言つて玉置は、熱のさめた女から佗しく去つて行くみたいな背を、その十字路に向けた。

そこは、市場通りと昭和通りとが相結ぶ口に當つてゐたから、自動車の往來は大變なのだつた。昭和通りの殆んど外れ、或は、はじまつたばかりと言ふか、その昭和通りから別れて、市場通りがはじまるところである。

銀座の方から言ふと、銀座七丁目の、資生堂のあの十字路、あれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

から東銀座に入つて、昭和通りと交叉する地點が、これである。昭和通りを越して更に眞すぐ行くと、その突き當りに、東京中央卸賣市場がある。

その道を、十字路から少し行つた左側のガレーヂから、去年の丁度大晦日のことだが、火を出した。私たちは、今その燒け跡の前を通つてゐる。それで私は思ひ出したのだが、その火事のときは、日頃の物凄い自動車の往來もぴたりととまつて、さしもの難所の十字路も實に悠然と横斷できたものだつた。火事騷ぎに、悠然もないものだが、かねて怨み重なる憎たらしい自動車が、そのときばかりは横行がかなはず、まことに痛快至極だつた。火事場へと實際は駈け足の横斷も、その痛快感から心理的には實に悠然といふのに他ならなかつた。人間も自動車も平等に通行していい筈の道路といふものを、わがもの顔に横行してゐる自動車から、初めて人間がその道路を奪回し得た——そんな感じでもあつた。十字路に、消防のホースが縱横に敷かれたために、自動車の交通が遮斷されたのである。といふことは、すなはち、消防自動車——自動車のおかげといふことに成るのは口惜しいが、しかし、そのときはたしかに、痛快感があつた。「いい氣味だつた——と、その後、新橋で飲んだとき、つい、うつ

かり、それだけ言つたもんだ。すると、おにいさん、ひどいことをと、若い妓にやられた」
いい齢をして子供つぽい痛快感だと、私はそれにも苦笑しながら玉置に言つた。そのとき、私のゐたお茶屋は、今はトラックの疾驅してゐる道路をへだてた向ひ側の横丁にある。新橋演舞場の方へ抜けると、その三つの横丁に新橋藝者の一流の、所謂お出先が、かたまつてゐる。
若い妓から叱られて私は、
「自動車のことを言つたんだ。大晦日に燒け出された人は、ほんとに氣の毒だ」
ガレーヂの隣りは蕎麥屋だつたが、年越し蕎麥で大童のところを火事では大變だつたらう。
「ホースの水で、お姐さんたちの出の着物が、みんな水びたしになつちやつたんですよ」
と若い妓は言つた。火事場の裏には、置屋があつた。
火事は晝間のことだつたが、その夜、置屋のある路地を私が通りかかると、人力車を降りた火事見舞の女に、置屋の者が、
「……ありがたうございます」
と言つてゐるのが、私の耳に入つた。狹い路地の、ごつた返しのその家の前へ、人力車で乘りつけた女は、お出先の女將らしい恰幅だつた。類燒を免かれたことが、二人の會話に出てゐたのだらうが、
「ありがたうございます」だけ聞いた私は、瞬間、奇異の感を與へられた。
「いい氣味だつた」だけでは、これも人に奇異の感を與へずにはおかない。若い妓にやられるのは當然だつた。伊藤博文が藝妓にやりこめられた結果、朝鮮統監に成つたといふ話は、今も新橋に傳はる有名な話だが、私は藝妓に叱られても、別に何のことは無い、ただ叱られつ放しである。

二

博文の挿話が今もつて新橋の自慢話として傳はつてゐるのは、昔も今も變らぬこの花街の性格といふものを示してゐるやうである。朝鮮を併合した日本の、そのときの總理大臣は桂太郎だつたが、初代の統監を誰にきめるかについて腐心した結果、酒盃の間にきめようと、山縣、伊藤、大山、井上、松方の諸元老を築地の飄家に招いた。新橋のえり抜きの藝者が、その席に侍つた。桂は伊藤を統監に推す肚だつたが、かねて伊藤びいきと言はれてゐる手前、自分からさうと口が切れない。座が白けて、藝者たちも取りなしやうがない。藝者のひとりの松田中の秀松が、伊藤の前で、膝に眼をおとしてゐた。すると、伊藤が、

「こら、秀松、居眠りする奴があるか」

「御前さま達が、むつつり黙つていらつしやるから、眠くもなるぢやありませんか」

と秀松は、やり返して、

「何がそんなに、難かしいんてございます」

「朝鮮へ行く親方をきめるのだから、難かしい」

「そんなこと、なんてもないぢやありませんか」

怒鳴られた腹いせに秀松は、伊藤をやりこめた。

「御前が、自分でいらつしやれば、いいぢやありませんか」

行きがかりで、つい、さう言つたのだが、その結果は、

「さうだ。伊藤さんが行くがいい」
この井上につづいて口々に、
「秀松の指名だ」
「さ、きまつた、きまつた」
――かういつたことは、今も昔も變らず傳統的に、ここで行はれてゐるやうだ。
私はさきに、新橋で飲んだと書いたが、それは、友人の、さる會社の重役に招かれてのことであつて、自腹を切つての遊びではない。もつとも友人も自腹を切つた譯ではないが、自腹を切らずに遊べる方法といふものに惠まれない私は、ひとから招かれたとき以外に、ここで遊んだことはない。玉置も――いや、玉置の方は、その氣さへあれば遊べる身分なのだが、藝者遊びは嫌ひなのだつた。だから、その玉置と私とが、女をだますのどうのといつた穩かならぬことを、冗談の口調でない故に一層穩かでなく言つてゐた、その對象の女からは、自然、ここの藝者たちは除かれるのである。そのせゐもあつてか、新橋演舞場の屋根を横眼で見ながら、
「あつちに曲らないで、眞すぐ行つてみようか」
と玉置は言つた。料亭の立ち並ぶ道を通して、向うに演舞場の柿色の煉瓦が見える。煙突から黑煙があがつてゐるのは、スチーム用の石炭をたいてゐるのだらう。
夜は高級車で充滿するその道も、晝さがりのこの時刻では、まだ一臺もその姿は無い。
立ち並ぶ料亭の裏は堀割だつた。その堀割にかかつた橋の右側を、市場へ向けて渡りかけて玉置は、ふと、立ちどまつた。

欄干の土臺石に、ペンキで「仕切場」と書いて、矢印がある、それに玉置は眼をとめたのだ。矢印の方を見ると、川岸へさがつた下に、あらゆる種類の屑が山をなしてゐて、ルンペン風の人々が、そのなかで、鈍い動きを見せてゐる。

橋際に黑い倉庫風の家があるのを何氣なく見て過ぎたが、私たちは改めて振り返つた。入口は他らしく、一面にトタン板が貼つてある。その上部に、大きな字で「汝等厚生の家」と、道に向けてさう書いてある。

その家の奥に、いづれも手製の哀れなルンペン小屋が、寒い川岸に沿つて、びつしりと並んでゐた。ほんの橋ひとつ隔てた反對側の川岸には、「蜂龍」「田川」「金田中」といつた一流どこの豪奢な建物が並んでゐる。

三

「沖津君は、お濱離宮に行つたことがあるかい？」

無いと、私が答へると、

「傍に來てゐながら……」

と玉置は笑つて、

「俺は、一度、入つたことがあるが、アベックだらけで驚いた」

「語るに落ちた。君もアベックだつたのだらう」

玉置は腕時計を覗いて、
「ひとつ、會はせるかな」
「さつきは、女がだませないなどと言つて、ちやんと、だましてゐるぢやないか」
「だましてたら、お濱離宮なぞ歩いてやしない」
「だまし中か。それにしても、お濱離宮とは、また」
「行かう行かうと言ふもんだから」
「若い子だな」
玉置は、それに答へず、
「アベックの多いのを見て、俺はつくづく思つた。若い男女のための戀愛の場所が、これで見ると、實にないんだ……」
「それは、いつか、僕も若い獨身の男に言はれたことがある」
若い戀人同士て行くところと言へば、喫茶店かダンス・ホール、または映畫館かにきまつてゐるが、靜かな語らひの場所として適當でない上に、その金も、まだそんなにサラリーの取れない若い身には、かなりの負擔になる。中年の男の方にばかり、やれ藝者だ、待合だ、バーだと享樂の設備が至れりつくせりなのは不都合だと、その若い男は言つた。
「さう言はれれば、その通りだが、われわれ中年男には、享樂はできても、若い人のやうな戀愛はできない」
玉置は、しんみりとした語調で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com